

# 豊饒の瀬戸内海を



グループ名：瀬戸内ウォッチャー

メンバー：宮川善行、沼田裕子、谷口すみ  
(SGS18期)

# 目次

|   |    |
|---|----|
| はじめに  | 1  |
| 第1章 瀬戸内海の役割と歴史                                | 1  |
| 1. 瀬戸内海の役割・機能                                 | 1  |
| 2. 経済発展と海の環境変化                                | 2  |
| 3. 開発工事、埋め立て                                  | 2  |
| 4. 藻場、干潟                                      | 3  |
| 第2章 瀬戸内海の漁獲量の推移と課題                            | 3  |
| 1. 漁獲量  | 3  |
| 2. イカナゴ                                       | 5  |
| 3. ノリ養殖                                       | 6  |
| 4. 養殖と赤潮被害                                    | 8  |
| 5. 漁業者  | 9  |
| 第3章 豊かな海へ                                     | 10 |
| 1. 森、川、海の繋がり                                  | 10 |
| 2. 海の栄養塩濃度の推移                                 | 12 |
| 3. 陸からの栄養塩供給の動向                               | 13 |
| 4. 栄養塩回復の様々な取組                                | 15 |
| 5. 下水処理の仕組みと役割                                | 16 |
| 6. 兵庫県の取組                                     | 17 |
| 第4章 結論と今後の課題                                  | 17 |
| 1. 海・漁業の変遷と現状                                 | 17 |
| 2. 提案1：豊饒の海を回復させ、漁業活性化                        | 20 |
| 3. 提案2：ネットワークの構築、海の管制センター設置【権限の集中、チーム連携、迅速対応】 | 21 |
| おわりに  | 21 |
| 参考文献  | 22 |

## プロローグ

神戸に定住する私たちにとって、瀬戸内海は身近な存在であり親しみがある。

仕事を離れ、地域社会・環境のことに意識を向けるようになっていくと、海の環境を危惧するニュースや記事がやたらと耳目に触れる。瀬戸内海では、その豊かさが損なわれる異変が生じ、魚が獲れなくなってきたというのだ。私たちにとって、レジャー・観光、そして何より海の幸を提供してくれる存在であったが、実態と真相は如何に、と胸中がザワザワして収まらない。

そもそも海とはどんな存在なのか、と思索に耽りたくなる。ただ眺めているだけでは見えない海の中、底の方まで覗き込んでみたい。海が、地球が、どのようにしてできたのか掘り下げなければ気が済まない、というより脳がどんどん引きずり込まれていく。

緑豊かな自然もさまざまな生き物も、そして青い地球も、海が要となって創出されてきた。あまりにも大きな存在である。海の起源と存在について調べている内に、驚くべき真実にたどり着いた。地球に海が誕生し、生命を誕生させてきたことが、実に奇跡的な条件が重なったことによることだったとは。

太陽系にハビタブルゾーンがある。惑星の中では地球だけが入り、水星も火星も入らない。そのゾーンだけに水が、個体ではなく気体でもない液体状態で存在できる。地球が誕生した時、地球にもその周囲の微惑星にも水は存在しなかった。しかし、どうして地球に水が？ 火星より外にしか水分を含む微惑星が存在しないというが……。惑星軌道を跨いだ軌道で回遊する彗星によって地球にもたらされたのが海の起源だと。有機物も同様に地球に届けられた。さらに驚くべきは、地球にもたらされた水の量だ。大部分はマントルとコアに吸収され、地表に出現した海の大きさが絶妙に今の自然と生命を育んだという。海は地球表面の7割を占めるが、重さは地球全体の0.023%しかないのだと。大きすぎても小さすぎても、生命の種類もホモサピエンスの誕生も違っていたのではないかと妄想が止まない。それほど誕生した地球の位置と海のサイズが絶妙だったのだ。

海の中や底は見えない、わからない、気づかないことが多い。人は耳目に触れないことに関心を寄せようとしない傾向がある。海はきれいであってほしいということと、魚を食べることがどんなつながりがあるかなど、普段考えもしない。いろいろなことが関係していることを考えずに（あるいは特定の人たちに都合のいいように）海上に露出している部分を見て手を加えようとする。後に、やってしまった結果の影響（失策、愚かさ）に驚く。地球のプレート、地震、火山帯は、陸海を問わず関連している。陸上の自然も活動も、海に影響を与える。人の生活もつながっている。連鎖があり、その関係を解きほぐすことで海の実態が少しずつ浮かび上がってくる。

世界につながる海。すべてを捉えようとしても掴みどころがない。まずは瀬戸内海を知ることだと思い、実態を調べ、どうすればいいか考える。

瀬戸内海は、都会に近いと、さまざまなレジャーの場となっている。ウィンドサーフィン、ヨット、海水浴、釣りなどのマリンスポーツが楽しめる。多くの島々が織りなす景観を

有する国立公園であり、橋などの人工の美と合わせた美観が楽しめる癒しの場でもある。そして何といても、観光船・貨物船などの海上交通が、地域経済を支えてきた。そんな誰もが感じ認識してきた海ではなく、海の中にどんな異変が生じているか、私たちの好奇心を刺激して止まない。

神戸シルバー大学院内に研究チーム「瀬戸内ウォッチャー」（メンバーは、宮川善行、谷口すみ、沼田裕子、竹中恭三の4名）を立ち上げ2年半が経過。昨（2022）年12月14日、終に外部発表会で「豊饒の瀬戸内海を」と題して研究の成果を発表した。そしてここに、論文としてまとめる。